

みなこの歴史散歩 No.24

縄文時代の大背戸遺跡

(大背戸遺跡出土土製品・町指定文化財)

社会教育担当 望月 暁

大背戸遺跡登場までの縄文時代

縄文時代は約一万四千年続いた時代で6つの時期(草創期・早期・前期・中期・後期・晩期)に分けられます。後期旧石器時代と縄文時代の違いとして土器の利用、弓矢の使用、定住の開始がありますが、これらは一度ではなく徐々に整っていききました。3つの要素がそろるのは前期といわれます。

町内の遺跡を見ると、早期までは自然の洞穴や岩陰を利用した痕跡が数多く残されています。妙音寺洞穴遺跡(大字皆野)では早期の土器とともに埋葬人骨が出土し、当時の食生活や行動パターン、身体の状態などが明らかになりました。

前期は変化が大きい時期で、現在の町の中心がある河岸段丘上に、竪穴式建物がつくられ始めますが、半ばには洞窟や岩陰の利用が活発になり、やがて山間部へ生活の場が移りました。宝登山中腹にある岩鼻遺跡では、巨大な緑泥片岩のそばで火

をおこし、土器を供えた跡が見つかっています。

大背戸・駒形の大集落

大背戸遺跡が歴史の舞台に登場するのは中期の終わり、加曾利E式土器の時期です。この時期に町内の遺跡は数、分布の範囲ともに大きな広がりをみせます。

大背戸遺跡は皆野中学校の工事ともない調査されました。沢をさした隣に駒形遺跡があります。2つの遺跡からは床に平石を敷き詰めた敷石住居址と呼ばれる建物跡や、石棺状に石を組み合わせた土壇が出土しており、共通点が多いことから、両遺跡は一つの大きな集落を形成していたと考えられます。



大背戸遺跡の装飾品

大背戸遺跡からは町指定文化財になっている土製品が出土しています。腕輪、耳飾り、垂飾(身体に吊り下げるペンダント)など種類が豊富です。土製品のデザインは、下位製品(腕輪)や特定の場所で獲れる石材(耳飾り・垂飾)で作られた、いわばブランド品であったと思われるかもしれません。実際に近隣の新井遺跡からは新湯姫川産と推定されるヒスイ製の垂飾が出土した記録があります。

また大背戸遺跡の土製品には朱が塗られた痕があります。朱は土器から祭祀具まで、多くの用具を彩った色であり、同時にヒスイの緑と対する色でもありました。

大背戸遺跡の終わり

縄文時代後期は列島全体から大きな集落が消える時期で、長期間の寒冷化が原因ともいわれます。駒形遺跡では縄文時代晩期までの土器が出土しているのに対し、大背戸遺跡では後期終わり以降の痕跡がほとんどなく、この時期に大背戸・駒形の集落は縮小し、駒形側へ中心が移ったと思われる。大背戸遺跡は町内の縄文時代の最盛期を彩った遺跡といえるでしょう。



垂飾



貝輪



敷石住居址